

[研究ノート]

1515年のヴィーン会議における祝祭 —人文学者ヨハネス・クスピニアン「日誌」より—

Die Feste beim Wiener Kongress von 1515
im “Diarium” Johannes Cuspinians

田 中 圭 子
Tanaka Keiko

はじめに

1515年7月、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世は、ヤギェウォ家の二人の王、すなわちハンガリー・ボヘミア王ウラースロー（ヴラディスラフ）2世と、その弟であるポーランド王ジグムント1世を、ハプスブルク家の宮廷都市であったヴィーンに招き、両家の間に生じていた諸問題に関する協議を行ったうえで、いくつかの点で重要な合意に達した。この会合は一般にヴィーン会議と称されているが、ここでウラースローの息子ラヨシュ（ルドヴィーク）とマクシミリアンの孫娘マリアの婚約、さらにラヨシュの姉アンナとマリアの兄カールもしくはフェルディナントの婚約が公に締結されたことは、その後のハプスブルク家によるハンガリー・ボヘミア王国相続（1526年）、さらにはドナウ流域における広大なハプスブルク君主国の成立を準備した出来事として、つとに知られている。さらにこの会議では、皇帝とポーランド王の対立点であったドイツ騎士修道会の地位をめぐる問題について、騎士修道会に対するポーランド王の宗主権をマクシミリアンが個人として承認する、という形で妥協が成立し、両者の間で友好関係が取り結ばれた⁽¹⁾。これは、帝国首長としてドイツ騎士修道会を支持する立場にあったマクシミリアンにとっては、東方政策におけるひとつの方針転換を意味しており、また、ドイツ騎士修道会にとっては、ポーランド王に臣従する公国として1525年に世俗化するまでの過程におけるひとつの画期であったといえる。

このような重大な会合に際して、ヤギェウォ家の国王たちと彼らに従う諸侯、高位聖職者、宮廷人や兵士たちを迎えたマクシミリアンは、ヴィーン入市や婚約の儀礼のみならず、宴や舞踏、馬上試合などの祝祭的な催しを次々に行った。そのためヴィーン会議は、政治史的観点からのみならず、儀礼や祝祭を政治理念や社会秩序の可視化された表現とみなす視点からも、おおいに注目される。主としてフランス語圏や英語圏の歴史家たちにより着手されてきた祝祭研究においては⁽²⁾、中世・ルネサンス期の神聖ローマ帝国内の事例が取り上げられることは比較的少なかったが、近年はドイツ語圏においても、この分野の研究は活況を呈している⁽³⁾。ただしその中では、祝祭を対象とする研究よりも、法的な地位の

変化を伴う、戴冠に代表される諸儀礼を扱う研究が先行している傾向がみられ、ヴィーン会議に際して行われた祝祭に関しては、十分な分析的研究はいまだ現れていない⁽⁴⁾。そこで本稿では、マクシミリアン時代の政治的表象の問題に取り組むための予備的作業のひとつとして、ヴィーン会議における祝祭的側面を史料に即して明らかにし、その目的や特徴を把握することを試みたい。

ここで用いられる史料は、マクシミリアンに顧問官として仕え、学芸と政治の両面にわたる活動を行った人文学者、ヨハネス・クスピニアンが残したヴィーン会議についての記録である⁽⁵⁾。クスピニアン自身、使節として幾度となくヤギェウォ家の宮廷に派遣され、数年にわたる外交交渉に尽力してきた人物である⁽⁶⁾。また、ヴィーン在住の知識人として、この地で開催された祝祭等の準備に何らかの形で関わった可能性も高い。皇帝の信任を受けた外交官でなければ知りえない交渉の内実から、衆目の前で展開された祝祭的な外面に至るまで、ヴィーン会議のあらゆる側面を知悉していたであろうクスピニアンの証言は、きわめて貴重な史料であると考えられる。ただし、印刷物として公刊されたこの記録では、幅広い読者に対して伝達すべきと意図された事柄のみが取り上げられ、叙述されているであろうことに留意せねばならない。クスピニアンの筆を通して描き出された、同時代人にとってのヴィーン会議のイメージが、ここで明らかにされるべき対象となるはずである。

本稿の構成は以下の通りである。まず、第1節ではヨハネス・クスピニアンの生涯について、第2節ではクスピニアンによるヴィーン会議の記録について、それぞれ概要を述べる。第3節では記録された祝祭の具体相を示し、第4節ではクスピニアンによる記録と祝祭自体の目的についての考察を試みることにする。

1 ヨハネス・クスピニアン

ヨハネス・クスピニアンは、帝国都市シュヴァインフルトの有力市民であり1490年には市長職も務めたハンス・シュピースハイマーの息子として、1473年に生まれた。シュヴァインフルトのラテン語学校、ライプツィヒ大学などで学んだ後、1492年にヴィーンへ赴き、マクシミリアン1世の父である皇帝フリードリヒ3世の周囲に集う知識人たちの知己を得た⁽⁷⁾。ドイツ語のシュピース (Spieß) は「槍」を意味するが、これをラテン語のクスピス (cuspis) に置き換え、クスピニアヌスと名乗りはじめたのは、この頃からである⁽⁸⁾。また、1493年にマクシミリアンから桂冠詩人の称号を与えられたことは、ハブスブルク家の宮廷において、この20歳の若者に寄せられていた期待の大きさを示しているといえよう⁽⁹⁾。

その翌年からクスピニアンはヴィーン大学医学部に籍を置き、1499年には医学博士の学位を得ているが、その一方で人文学的な講義を行いたいとの希望をも表明していた⁽¹⁰⁾。マクシミリアンによってヴィーン大学に招聘された著名な人文学者、コンラート・ツェルティスが1497年に到着し、彼の提唱によって知識人サークル「ドナウ文芸協会」(Sodalitas litteraria Danubiana) が活動を開始したが、クスピニアンはその主要メンバーの一人であった。ツェルティスが1508年に死去した後は、その後継者としてヴィーン大学の詩学・修辞学教授に就任している。

ヴィーン大学において総長、医学部長、領邦君主の任命による大学監督官を歴任する一方で⁽¹¹⁾、クスピニアンはマクシミリアンの外交使節としても働いていた。ヤギェウォ家との交渉が主たる任務であり、1510年からヴィーン会議が開かれるまでの5年間に、ほぼ20回にわたってハンガリー王の宮廷に派遣されている⁽¹²⁾。1512年には皇帝顧問官の称号を得ており、1519年にマクシミリアンが没した後も、ハンガリーとの関係についての専門家として、カール5世とフェルディナント1世から信頼を寄せられていたようである。

クスピニアンの主要な著作としては、1510年頃から手がけられた『ローマ皇帝伝』⁽¹³⁾、1527年ないし28年から執筆が開始された『オーストリア』⁽¹⁴⁾があげられる。前者は、ローマ皇帝とその後継者であるドイツ皇帝のみならず、ビザンツ帝国のギリシャ人皇帝と、その地位を奪ったトルコ人皇帝をも含めて、現在すなわちマクシミリアン1世の時代に至るまでの歴代皇帝を扱おうとする歴史書であり、ハプスブルク家の皇帝たちが有する帝権を古代ローマ時代からの連続性の中で示そうとする点で、マクシミリアンの皇帝理念と軌を一にしている⁽¹⁵⁾。後者は、オーストリアの支配者の歴史およびオーストリアとヴィーンの地誌の2部から構成されるはずであったが、未完に終わっている⁽¹⁶⁾。クスピニアン自身は1529年に世を去り、ヴィーンの聖シュテファン大聖堂に葬られた。

2 ヴィーン会議の「日誌」

クスピニアンが著したヴィーン会議の記録は全35ページの小冊子であり、この会合とそれに伴う一連の行事が1515年8月5日に終了した後まもなく、ラテン語で執筆された⁽¹⁷⁾。本文の前には、ヴィーン会議の開催を財政面で支えた、マクシミリアン1世の財務官ヤコプ・フィリンガーへの献辞が添えられている⁽¹⁸⁾。同年中にこの記録のドイツ語版も出版されたが⁽¹⁹⁾、翻訳者は不詳である。ドイツ語版ではフィリンガーへの献辞は省かれており、ページ数は32ページとなっている。

ラテン語版、ドイツ語版の第1ページには、いずれも同じ木版画が掲げられている。中央には、ミトラ冠と金羊毛騎士団の標章、盾持ちのグリフィンに囲まれた双頭の鷲の紋章盾が描かれている。これは神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世の紋章であり、画面の四隅には、向かって左上にオーストリア、右上にシュタイアーマルク、左下にケルンテン、右下にクラインの紋章盾が配されている。

木版画の上には「名高きマクシミリアン皇帝とハンガリー、ボヘミア、ポーランド3国の王たちによる1515年7月にヴィーンにて催された会合についての簡潔にして真実なる叙述」と表題が記されている⁽²⁰⁾。ラテン語版では、本文の冒頭に「ヴィーン市顧問官ヨハネス・クスピニアンの日誌」⁽²¹⁾で始まる題がさらに挿入されているため、本稿では、この著作に対して「日誌」という略称を用いることとする。

本文中では章や節への区分はなされておらず、見出しも特に付されていない。叙述はほぼ時系列順に行われており、日付とその日の出来事が明確に示されている。本文前半は、1515年初頭からのヤギェウォ家との外交交渉、特に4月2日から5月20日にかけてブラティスラヴァで行われた、マクシミリアン側の代表マテウス・ランク枢機卿とポーランド王、ボヘミア王の三者による会談の経緯に関する説明にあてられている⁽²²⁾。後半は、マク

シミリアン自身と二人の国王が7月16日から28日までの期間にヴィーンで行った会合と、これに関連する様々な行事についての報告であり、それらの終了後ポーランド王がヴィーンを出立した8月5日をもって記述が終わっている⁽²³⁾。

3 ヴィーン会議における祝祭

本節では、1515年のヴィーン会議に付随して行われた祝祭的な催しについて、クスピニアンの「日誌」後半部分をもとに記述し、これを通して主要な催事の枠組みを把握することとしたい。

まず、ヴィーン会議期間中の主な行事を、日付とともに示しておく。

- 7月16日 ヴィーン郊外にて、皇帝マクシミリアンがハンガリー・ボヘミア王ウラースローとポーランド王ジグムントを出迎える会見
- 7月17日 皇帝と国王たちのヴィーン入市
- 7月18日 休日
- 7月19日 王宮にて会談、夜は舞踏
- 7月20日・21日 会談
- 7月22日 王宮にて会談、聖シュテファン大聖堂にて婚約式、その後ノイアーマルクト広場で馬上試合、夜は会食
- 7月23日 ヤギェウォ家の人々への贈り物
- 7月24日 会談、午後は馬上試合、夜はカード遊戯
- 7月25日 アム・ホーフ広場にて馬上試合、夜は舞踏、深更まで宴会
- 7月27日 公文書作成
- 7月28日 公文書作成、決定事項の布告

これら一連の行事の中で、とりわけ多くの人々が参加し、「日誌」においても他の出来事より多くの紙幅が費やされているのは、7月16日の出迎えの会見、17日のヴィーン入市、22日の婚約式であった。したがって、ここでは以上の3点に焦点を当て、「日誌」に基づいて具体的な展開を追ってゆくこととしたい。

(1) 出迎えの会見（7月16日）

皇帝マクシミリアンがヤギェウォ家の国王たちを迎える会見は、ヴィーンとハンガリー国境との間に位置するトラウトマンズドルフの野で行われた⁽²⁴⁾。双方ともに豪壮華麗な大行列を仕立てて移動し、目印となる木が立てられた丘で落ち合う予定であった。詳細については、前夜に打ち合わせを行って決定されていたようである⁽²⁵⁾。当日の早朝、最初に出発したのは皇帝側の行列であり、その構成を要約して以下に示す。

先頭に立つのは、赤い装束をまとうヴィーナー・ノイシュタットのメルヒオール・フォン・マスミュンスター。さらに皇帝の廷臣、貴族、商人、ヴェルテンベルク公とランク枢機卿の廷臣が続く。

次いで、黒ピロードの衣装の少年たちに伴われた皇帝の馬13頭、紋章官、トランペット奏者12名、鼓手2名が、皇帝の先触れをする。帝国の聖俗諸侯、皇帝の護衛の後に、緋色

と黒のビロードで覆われた輿に乗ったマクシミリアンが登場する。その傍らにはランク枢機卿本人とイングランド使節が控え、やはり黒ビロードの服を身に付けた貴族を従えている。その後には皇帝に仕える宮廷長や官房官、聖職者らが並び、彼らの中には「日誌」を献上された財務官フィリンガー、ハプスブルク家に多額の融資を行い、ハンガリー銅山へも進出していたアウクスブルクの大商人ヤーコブ・フッガーも交じっている。

トランペット、トロンボーン、大太鼓を奏する楽師たちの後に、主馬頭レオンハルト・ラウバーが黒衣の人々を率いて続く。バイエルン公ヴィルヘルム、ブランデンブルク辺境伯カジミール、そしてフランケン、フォアアールベルク、オーストリアなどの貴族が行列の殿をなす。

目印の木の下に到着した皇帝が号砲を撃たせると、これを合図にハンガリー王、ポーランド王の行列が動き出した。先行してやって来たのは、ハンガリー騎兵の大部隊、青服と白帽の「モスクワ人」、トランペットやシャルマイを携えた楽師たちを伴う「タタール人」である⁽²⁶⁾。

ドイツ風に装ったトランペット奏者と鼓手が両王の先触れを行い、ハンガリーとボヘミアの貴族や宮廷の高官がこれに続いた。ラヨシュ王子は赤と金の衣装で騎乗して現れ、アンナ王女は白馬8頭が引く黄金の馬車に乗っていた。その傍らには、皇帝側の行列に参加したブランデンブルク辺境伯カジミールの弟、ゲオルクが付き従っている。ポーランド王は馬で、ハンガリー王は皇帝の贈り物である赤ビロードを張った輿に乗って行進し、いずれも緋色の装束をまとっていた。行列の最後は、バコーツ・タマーシュ枢機卿を筆頭とするハンガリーとポーランドの高位聖職者や高官たちである。

二つの行列が落ち合ったところで、マクシミリアンは自身の姿がよく見えるように輿の覆いを外させ、ヤギェウォ家の人々に手をさしのべて、ラテン語であいさつの言葉を述べた。これに対してまずポーランド王が、次いで喜びのあまり落涙しながらハンガリー王が、やはりラテン語で応答を行った。また、ラヨシュ王子は「馬上からこのうえない尊敬をこめて皇帝に話しかけ、あたかも父に対するかのようにあいさつした」⁽²⁷⁾。アンナ王女も同様に馬車からあいさつを行った。

だが、マクシミリアンが自らに従ってヴィーンへと赴くよう彼らを招いたとき、ハンガリー・ポーランド側から皇帝に対する不信の声があがり、予期せぬ論議が起きて一時進行が滞った。この事態を鎮めたのは、ポーランド王による皇帝への信頼の表明であり、その後は予定された通り、ともに行進を続けることとなった。ただしこの日はまだヴィーンには入らず、一行は近郊の城や村などに分散して一夜を過ごした。

(2) ヴィーン入市 (7月17日)

翌17日は、好天に恵まれた前日から一転して雨となったが、ヴィーンに入る華やかな行列は予定通りに決行された⁽²⁸⁾。

市外に出て一行を迎えたのは、6名の都市参事会員に先導された都市の兵士1500名と帝国の兵士300名。市門で待ち受けていたのは、聖品を捧持する托鉢修道会士、皇帝の世襲地やハンガリー、ボヘミア、ポーランドの紋章を掲げる市民の子弟、ヴィーンの教会の司祭、ヴィーン大学の学生と大学総長以下すべての教師、旗とろうそくを手にした手工業者

であった。

ヴィーンに入る行列は、前日のように別々に仕立てられるのではなく、双方が共同で行う形に編成された。先頭はランク枢機卿の廷臣とバイエルン公ヴィルヘルムの一行であったが、その後にはハンガリー騎兵が続き、さらにブランデンブルク辺境伯カジミールら皇帝側の貴族の後に、ハンガリー騎兵、「モスクワ人」、「タタール人」、「トルコ風の赤い装束の者たち」、ヤギェウォ家の国王たちに仕える聖俗諸侯や廷臣が列をなした。おそらくは両陣営に属する者たちが交互に並ぶよう構成されていたと推測されるが、その後には長々と連なった行列については、雨とそれによる混乱のために、ドイツ人、ハンガリー人、ボヘミア人、ポーランド人、「モスクワ人」、「タタール人」などが入り混じって行進したと伝えられるのみである。

皇帝と国王たちの先触れをなすのは、黒い衣装の13人の少年、主馬頭ラウバー、帝国とハンガリーおよびボヘミアの高位聖職者、教皇使節とアラゴン使節である。ランク枢機卿とバコーツ枢機卿、顧問官らの後には、皇帝の紋章官とトランペット奏者が続き、貴族の一団を従えた行列の主役が登場する。ポーランド王とラヨシュ王子は並んで騎乗し、皇帝とハンガリー王は前日同様に輿に乗っている。馬車の中のアンナ王女にはブランデンブルク辺境伯ゲオルクらが付き添い、その後には宮廷の女性たちの馬車のほか、なお数多くの騎馬の者たちが続いた。この日の行進では3500頭もの馬が列をなし、その他にも600頭が加わっていたと報告されている。

こうしてヴィーンに入った皇帝と王たちは聖シュテファン大聖堂に向かい、ヴィーン司教から祝福を受けた。また、そこでは皇帝の宮廷楽団によってテ・デウムが演奏された。

(3) 婚約式（7月22日）

この日は、まず王宮で皇帝と国王たち、顧問官らによる会談が行われた⁽²⁹⁾。続いてマクシミリアンからアンナ王女に金の冠が贈られた後、一同は聖シュテファン大聖堂に向かった。

聖堂内陣は金襴や絹で飾られており、その右側に皇帝⁽³⁰⁾、ハンガリー王、ポーランド王、その後ろにラヨシュ王子、イングランド使節とマクシミリアンの孫であるカールの使節、さらにバイエルン公ヴィルヘルム、ブランデンブルク辺境伯カジミールら帝国の貴族、ハンガリー、ボヘミア、ポーランドの貴族が居並んだ。内陣中央にはアンナ王女とマリア大公女のための2脚の椅子が設えられ、その脇にはアラゴン使節とバイエルン公ヴィルヘルムの弟ルートヴィヒ、ブランデンブルク辺境伯ゲオルクらが、背後には女性たちが控えていた。左側にはバコーツ枢機卿とランク枢機卿を筆頭に、帝国と3つの王国の高位聖職者が整列した。ヴィーン司教と宮廷楽団が荘厳ミサ曲を演奏し、これまでにない斬新な音楽が聞かれたと伝えられている⁽³¹⁾。また、オルガンの第一人者パウル・ホーフハイマーもこの演奏に加わった⁽³²⁾。ミサ終了後、ランク枢機卿に仕えるイタリア人リッカルド・バルトリニが祝辞を述べ始めたが、列席者が傾聴しようとしなかったため中断せざるをえなかった⁽³³⁾。

その間にマクシミリアンは別室で衣装を改め、皇帝としての式服と冠を身に着けて内陣に戻り、この日のもっとも重要な儀礼に臨んだ。すなわち花婿の代理を務めるマクシミリ

アンとアンナ王女、そしてラヨシュ王子とマリア大公女の婚約が、バコーツ枢機卿によって執り行われたのである。

その後、玉座についた皇帝と国王たちは、200名以上に対して騎士叙任を行った。大聖堂での儀礼を締めくくったのは、バコーツ枢機卿による祝福とランク枢機卿による参列者の贖宥の宣言、奏楽とテ・デウム合唱であった。

午餐の後、ノイアーマルクト広場にて、皇帝や国王たちが観覧する前で3組の馬上試合が行われ、ブランデンブルク辺境伯兄弟もこれに出場した。

夜の祝宴の席では、マクシミリアンの顧問官ジークムント・フォン・ディートリヒシュタインとバルバラ・フォン・ロッタールの結婚式も行われた³⁴。皇帝と国王たちが退出した後は舞踏の時間となり、出席者たちが宿舎に引き上げるまで続いた。

4 「日誌」と記録された祝祭の目的

本節では、「日誌」の刊行形態と内容をふまえて、この文書自体と、その中に記録された祝祭の目的についての指摘を行いたい。

まず、「日誌」は皇帝の勅許を得て刊行された文書ではなく、献呈相手もクスピニアンと同僚といえるフィリンガーであるため、彼らが深く関与した仕事の成果としてのヴィーン会議について、クスピニアン自身の手で記録を残そうとしたことが、元来の執筆の動機であったのではないかと推察しうる。また、本文の冒頭部において、マクシミリアンは強力な王家と姻戚関係を結ぶことによって永続的な平和をもたらしたと述べられ、特にハンガリー・ボヘミア王家との二重結婚を通じて「下オーストリアに確固たる平和を作り出し」、「隣接する諸邦はトルコやその他の敵に対してより安全になる」との説明がなされている³⁵。つまり、オスマン・トルコに対抗し、防衛を行うための同盟形成が、ヴィーンで執り行われた盛儀の意義であったと読者に伝えること、それが「日誌」において意図された目的であったと考えることができる。

ここで想定された読者は、まずはヴィーンを中心とする下オーストリア、その西隣の上オーストリア、さらにハプスブルク家の世襲領を構成するその他の諸邦、特にオーストリアの南に位置し、アドリア海に向かって連なるシュタイアーマルク、ケルンテン、クラインの人々であったと推測される。「日誌」の表題ページにこれら諸邦の紋章が掲げられていることが、その推測のひとつの根拠である。また、神聖ローマ帝国の東境にあたるこの地域では、実際にトルコの脅威にさらされる危険性も高かった。一方、ラテン語版に加えてドイツ語翻訳版も出版されていることから、著者クスピニアンの属するエリート層内部に限られない幅広い読者層において、ヴィーン会議への関心と、その記録に対する需要が存在したことも看取される。クスピニアンの「日誌」は、ヴィーン会議の記録であるとともに、同時代人にとっての意義を簡潔に解説した文書でもあり、結果的に、マクシミリアンの政策のひとつの到達点について広く知らしめる役割を果たしたと評価しうるであろう。

ヴィーン会議そのものの性格については、帝国議会のような国制の中に位置づけられた機関とは異なり、ハプスブルク家とヤギェウォ家という二つの「家」の間で合意を形成するために設けられた機会であったと、あらためて確認しておきたい。そもそもヤギェウォ

家の兄弟王の母は、ポーランド王にしてリトアニア大侯であったカジミェシュ4世に嫁いだハプスブルク家のエリーザベトである⁶⁶。また、「日誌」に名を記されている世俗諸侯の中で筆頭に位置づけられるバイエルン公とブランデンブルク辺境伯は、いずれもハプスブルク家と血縁関係を有している。バイエルン公兄弟の母は、マクシミリアンの妹クニグンデであるため、彼らは皇帝の甥にあたる。一方、ブランデンブルク辺境伯兄弟の母は、上述のエリーザベトの娘ゾフィーである。したがって、彼らはヤギェウォ家の王たちの甥であると同時に、ハプスブルク家の縁者でもあることになる。兄カジミールが皇帝側、弟ゲオルクがハンガリー王側の一員として行進に参加し、両家の間をつなぐ役割を担っていたのは、この血縁関係に由来するといえよう。さらに、この会議に参加したヴェルテンブルク公ウルリヒは、皇帝の姪にあたるバイエルン公家のザビーネを娶っている⁶⁷。ヴィーン会議は、まさに二つの王朝をめぐる血縁・姻戚ネットワークが現出する場であった。

そこで表現された最大の主題は、ハプスブルク家とヤギェウォ家の結合の深まりである。「日誌」の記録からは、ヴィーン会議における催事がこの目的に向かっていかに構成されていたか、その枠組みを明瞭に読み取ることができる。その中で最も重要な位置を与えられていたのは、一連の行事の劈頭にあたる、皇帝が二人の国王を出迎える会見、これに続くヴィーン入市であるといえるだろう。まず、事前に打ち合わせされた次第に沿って遂行された出迎えの会見は、入念に演出された一種の儀礼であったとみなしうる。それぞれ別地点から出発した両家の長大な行列が定められた地点で落ち合い、そこでマクシミリアンとウラスロー、ジグムント、ラヨシュ、アンナが直接挨拶を交わす場面がこの日の儀礼的行為の頂点をなした。そこでマクシミリアンとラヨシュを「親子」であるかのように表現している点に、ヤギェウォ家の相続者をハプスブルク王朝へ組み込もうとする意図も窺われる⁶⁸。そして翌日は、両家の行列が一つの行列に編成し直され、ともにヴィーン入市を行うことによって、二つの王朝の統合をはっきりと可視化してみせたのである。また、このような大掛かりなスペクタクルに加え、教会における婚約、両家の間での贈り物、祝いの食事をともにする共餐、公文書の作成と布告など、結婚による結びつきを強化するための何重もの儀礼と手続きが、ヴィーン会議の期間中に実行された。

これほどまでに周到な積み重ねが必要とされたのは、ここで定められた二重結婚が、ハプスブルク世襲領とハンガリー・ボヘミア両王国の相続に関わる重大な意義を有すると認識されていたためだけではなく、ヴィーン会議の開始が間近となってもなお、両王朝の同盟と結合が成立する見通しが確実ならざる状況であったことにもよるのではないかと考えられる。それを端的に示すのが、出迎えの会見の終了間際、マクシミリアンの招待に従いヴィーンへ向かうことに異議を唱えたハンガリー、ポーランド側の貴族たちの存在であろう⁶⁹。ハンガリーにおけるウラスローの王権は強力とはいいがたく、彼の立場からすると反国王的な貴族勢力に対抗するためハプスブルク家との同盟を求めた、という側面がある。これに対する貴族たちの不満の高まりを抑えるためにも、ことさらに大掛かりなスペクタクルを含む一連の祝祭を計画した可能性も排除できないであろう。

以上の通り、ヴィーン会議の期間中に行われた様々な祝祭的行事は、全体として二つの王朝の結合を深めるとともに表象する行為として計画され実施されたと考えられる。また、本稿では「日誌」に基づいてその全体的な枠組みを抽出することもできた。「日誌」の記

述は、祝祭の参加者たちの序列や衣装・装飾に用いられた色彩などにも及んでいるが、それら細部に関する分析と検討は、今後行われるべき課題に属する。また、神聖ローマ帝国内における様々な事例、とりわけ帝国議会という場で行われた儀礼や祝祭との比較、さらにマクシミリアンの前後の世代における事例との比較を行うことによって、王朝と帝権の表象の歴史の一角を明らかにすることができるであろう。

[注釈]

- (1) 阿部謹也『ドイツ中世後期の世界 ドイツ騎士修道会史の研究』未来社、1974年、395～410頁。Hermann Wiesflecker, *Kaiser Maximilian I. Das Reich, Österreich und Europa an der Wende zur Neuzeit*, Bd.4, Wien, 1981, S.192-195.
- (2) Jean Jacquot (ed.), *Les fêtes de la Renaissance*, 3 vols., Paris, 1956-1975; Bernard Guenée / Françoise Lehoux, *Les entrées royales françaises de 1328 à 1515*, Paris, 1968.ロイ・ストロング、星和彦訳『ルネサンスの祝祭(上・下)』平凡社、1987年。フランシス・A・イエイツ、西澤龍生・正木晃訳『星の処女神 エリザベス女王』東海大学出版会、1982年。同『星の処女神とガリアのヘラクレス』東海大学出版会、1983年。これらの先駆的研究において、神聖ローマ皇帝カール5世の祝祭・儀礼が取り上げられている例もみられるが、いずれもネーデルラントやイタリアにおける事例が中心となっている。
- (3) ここでは近年公刊された論集などの例をあげておく。Heinz Duchhardt / Gert Melville (hrsg. v.), *Im Spannungsfeld von Recht und Ritual. Soziale Kommunikation in Mittelalter und früher Neuzeit*, Köln, 1997; Barbara Stollberg-Rilinger (hrsg. v.), *Vormoderne politische Verfahren*, Berlin, 2001; Andrea von Hülsen-Esch (hrsg. v.), *Inszenierung und Ritual in Mittelalter und Renaissance*, Düsseldorf, 2005; Marion Steinicke / Stefan Weinfurter (hrsg. v.), *Investitur- und Krönungsrituale. Herrschaftseinsetzungen im kulturellen Vergleich*, Köln - Weimar - Wien, 2005; Barbara Stollberg-Rilinger / Matthias Puhle / Jutta Götzmann / Gerd Althoff (hrsg. v.), *Spektakel der Macht. Rituale im alten Europa 800-1800*, Darmstadt, 2008, 2. Aufl., 2009.
- (4) ヴィーン会議における祝祭の音楽的側面に関しては、次の研究がある。Leopold Nowak, “Zur Geschichte der Musik am Hofe Kaiser Maximilians I.”, in: *Mitteilungen des Vereins für Geschichte der Stadt Wien*, Bd.12, 1932, S.71-91.
- (5) 注(17)、(19)参照。
- (6) クスピニアンの生涯と著作については、Hans Ankwicz-Kleehoven, *Der Wiener Humanist Johannes Cuspinian. Gelehrter und Diplomat zur Zeit Kaiser Maximilians I.*, Graz - Köln, 1959; Winfried Stelzer, “Cuspinianus (Spieshaymer, Spieß-, -heimer), Johannes”, in: Franz Josef Worstbrock (hrsg. v.), *Deutscher Humanismus 1480-1520. Verfasserlexikon*, Bd.1, Berlin, 2008, Sp.519-537. (以後、*Verfasserlexikon*

- と略記する。)
- (7) クスピニアンの出自と青少年期については、Ankwicz-Kleehoven, *op.cit.*, S.5-8.
 - (8) *Ibid.*, S.10. 本稿では、ラテン語形は用いず、ドイツで一般的に用いられているクスピニアンという形に統一している。
 - (9) 皇帝側は、桂冠詩人に対して文筆の力で帝権を支える役割を期待していた。作家としてのみならず、雄弁の才を活かして外交の領域でも活躍したクスピニアンは、理想的な形で皇帝に貢献した例であったとされる。Alois Schmid, “»Poeta et orator a caesare laureatus«. Die Dichterkrönungen Kaiser Maximilians I.”, in: *Historisches Jahrbuch*, Bd.109, 1989, S.79f.
 - (10) Ankwicz-Kleehoven, *op.cit.*, S.12f.
 - (11) クスピニアンがヴィーン大学総長に選出されたのは1500年（任期は1学期間）、医学部長に選出されたのは1501年、1502年、1506年、1511年。大学監督官には1501年に任命され、終身この職を務めた。なお、大学監督官は領邦君主の影響力を大学内に確保するための役職でもあり、大学当局と対立することもあった。*Ibid.*, S.21-26.
 - (12) Ankwicz-Kleehovenによれば、1510年2回、1511年2回、1512年1回、1513年4回、1514年5回、1515年5回のハンガリー宮廷への訪問を行っている。*Ibid.*, S.47-84.
 - (13) 原題は、*De Caesaribus atque Imperatoribus Romanis opus insigne [...]*. 1540年にシュトラースブルクで刊行された。クスピニアンの死後に印刷されるまでの経緯については、Ankwicz-Kleehoven, *op.cit.*, S.265-278.
 - (14) 原題は、*Austria cum omnibus eiusdem marchionibus, ducibus, archiducibus, ac rebus praeclarè ad haec usque tempora ab iisdem gestis [...]*. 1553年にバーゼルで刊行された。
 - (15) Ankwicz-Kleehoven, *op.cit.*, S.298-301. クスピニアンは、この著作をカール5世に献上しようと考えていた。*Ibid.*, S.267.
 - (16) *Ibid.*, S.245-250, 280-284.
 - (17) Johannes Cuspinianus, *Congressus ac celeberrimi conventus Caesaris Max[imiliani] et trium regum Hungariae, Boemiae, et Poloniae. In Vienna Pannoniae, mense Julio. Anno M.D.XV. facti, brevis ac verissima descriptio*, Wien, 1515（以後、*Congressus* と略記する）。オーストリア国立図書館所蔵の刊本を参照した。献辞末尾の“Ex Vienna vigesima Augusti.”（ヴィーンより、8月20日。）との記載から執筆時期が知られる。*Ibid.*, p.4.
 - (18) *Ibid.*, pp.3-4. フィリンガーについては、Clemens Bauer, “Jakob Villinger, Gross-Schatzmeister Kaiser Maximilians. Ein Umriß”, in: id., *Gesammelte Aufsätze zur Wirtschafts- und Sozialgeschichte*, Freiburg - Basel - Wien, 1965, S.238-252; Hans Moser, *Die Kanzlei Kaiser Maximilians I. Graphematik eines Schreibusus, Teil 1: Untersuchngen*, Innsbruck, 1977, S.36f.; Wiesflecker, *op.cit.*, Bd.5, Wien, 1986, S.258-261.
 - (19) Johannes Cuspinian, *Der namhaftigen kay[serlichen] Ma[jestät] vnd dreyer Kunigen zu Hungern Beham vnd Poln zamenkumung vnd versamlu[n]g so zu wienn in dem*

- Heymonat: nach Christi gepurd M.D.xv.iar geschehe[n] ain kurtze vnd warhafte erzelung vnd erklarung*, Wien, 1515 (以後、*Zamenkumung*と略記する)。オーストリア国立図書館所蔵の刊本を参照した。
- (20) 原題については、注(17)、(19)を参照。
- (21) “*Diarium Joa[n]nis Cuspiniani prefect[i] Vrbis Viennen[sis]. . .*” *Congressus*, p.5.
- (22) *Ibid.*, pp.5-16; *Zamenkumung*, S.3-15.
- (23) *Congressus*, pp.16-35; *Zamenkumung*, S.15-32. 「日誌」で扱われている期間にクスピニアンとマクシミリアンの周辺で展開した事柄については、Ankwicz-Kleehoven, *op.cit.*, S.78-88; Wiesflecker, *op.cit.*, Bd.4, S.181-204.
- (24) この日の会見についての記述は、「日誌」の以下の箇所に基づく。*Congressus*, pp.16-20; *Zamenkumung*, S.15-19.
- (25) 7月15日夜、ハンガリー王のもとにクスピニアンが、ポーランド王のもとにランク枢機卿が派遣され、それぞれ打ち合わせを行っている。*Congressus*, p.16; *Zamenkumung*, S.14-15.
- (26) 「モスクワ人」(MoschoviteもしくはMoschi, Moskowiter)、「タタール人」(Tattari, Tataren)が、具体的にいかなる地域出身の人々であるかは明らかではない。北方や東方の異国風な装いをした人々を指しているのであろうか。
- (27) “*Ludovicus ut erat institutus ex equo su[m]ma cu[m] revere[n]tia Caesari dixit et tanq[uam] patrem salutavit, . . .*” *Congressus*, p.20.
- (28) この日のヴィーン入市についての記述は、「日誌」の以下の箇所に基づく。*Congressus*, pp.21-24; *Zamenkumung*, S.19-22.
- (29) この日の催事についての記述は、「日誌」の以下の箇所に基づく。*Congressus*, pp.26-28; *Zamenkumung*, S.24-26.
- (30) ここでマクシミリアンは、10万グルデンの価値のあるダイヤモンドを帽子につけて登場したと伝えられる。*Congressus*, pp.26-27; *Zamenkumung*, S.24.このことが端的に示すように、ヴィーン会議での祝祭は、ハプスブルク家の富と権威を誇示する場でもあった。これに先立つブラティスラヴァでの会談に際して、ヤギェウォ家の王たちが堂々たる入市を行ったことに対する対抗意識も存在したであろう。なお、ヴィーン会議の準備に必要な資金調達に貢献したのが、財務官フィリンガーと豪商フッガーであった。
- (31) ヴィーン司教ゲオルク・フォン・スラトコニアは、人文主義的素養と音楽的才能を併せもつ人物で、マクシミリアンの宮廷楽団長を務めていた。Theophil Antonicek / Elisabeth Theresia Hilscher / Hartmut Kronen (hrsg. v.), *Die Wiener Hofmusikkapelle I. Georg von Slatkonja und die Wiener Hofmusikkapelle*, Wien - Köln - Weimar, 1999.マクシミリアンの宮廷音楽とその研究史については、拙稿「マクシミリアン1世の宮廷における音楽と知識人」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』47巻、2010年、35～44頁。
- (32) オルガニスト、作曲家として知られるパウル・ホーフハイマーは、フリードリヒ3世の時代からハプスブルク家の宮廷で音楽活動を行っていた。この婚約式での演奏につ

- いては、Hans Joachim Moser, *Paul Hofhaimer*, Stuttgart, 1929, 2. Aufl., Hildesheim, 1965, S.26-28.
- (33) バルトリーニは、ランク枢機卿の依頼によりヴィーン会議の記録も残している。バルトリーニの生涯と著作については、Stephan Füssel, *Riccardus Bartholinus Perusinus. Humanistische Panegyrik am Hofe Kaiser Maximilians I.*, Baden-Baden, 1987; F. J. Worstbrock, “Bartholinus (Bartolini), Riccardus (Richardus, Riccardo)”, in: *Verfasserslexikon*, Sp.120-132.
- (34) バルバラは、マクシミリアンの政庁で働き、特に財務の分野で手腕を発揮したゲオルク・フォン・ロッタールの娘である。ロッタールとディートリヒシュタインについては、Wiesflecker, *op.cit.*, Bd.5, S.272-278.
- (35) *Congressus*, p.5; *Zamenkumung*, S.3.
- (36) エリーザベトの父であるハプスブルク家のアルプレヒト2世は、ルクセンブルク家の皇帝ジギスムントの娘を娶り、ハンガリー・ボヘミア王に即位するとともに(1437年)ローマ王にも選出された(1438年)。1439年に彼が没した後、その後継としてローマ王に選出されたのが、マクシミリアンの父フリードリヒ3世である。なお、アルプレヒト2世とフリードリヒ3世は、血縁関係から見ると再従兄弟にあたる。
- (37) さらに、マクシミリアンの姪ズザンネは、1518年にブランデンブルク辺境伯カジミールと結婚することとなる。
- (38) 二重結婚の最終的な契約文書は1515年7月22日付で作成されているが、これに先立つ7月20日に、ラヨシュをマクシミリアンの養子とする文書が交わされた。Wiesflecker, *op.cit.*, Bd.4, S.190-192.ベルンハルト・シュトリーゲルが1515年以降に描いたハプスブルク家の家族肖像画(ヴィーン、美術史美術館所蔵)にも、この構想は反映されている。その中には、マクシミリアンとその妻マリー・ド・ブルゴーニュ、息子フィリップ、孫カールとフェルディナントと並んで、ラヨシュの姿が描かれているのである。この家族肖像画については、Ankwicz-Kleehoven, *op.cit.*, S.191-193; Gertrud Otto, *Bernhard Strigel*, München - Berlin, 1964, S.67, 101; Hans Georg Thümmel, “Bernhard Strigels Diptychon für Cuspinian”, in: *Jahrbuch der Kunsthistorischen Sammlungen in Wien*, Bd.76, 1980, S.97-110.
- (39) マクシミリアンは、1515年10月に娘マルガレーテにあてた書簡の中で、ハンガリーとの婚姻の成立は、ひとえに(この場での論議を収めてくれた)ポーランド王ジグムントに負うものである、と述べている。二重結婚の締結に至る過程が、どれほど綱渡りに近い状態であったかをよく示す言葉であろう。M. Le Glay (ed.), *Corrèspondance de l'empereur Maximilien I^{er} et de Marguerite d'Autriche (1507-1519)*, vol.2, Paris, 1839, no.605, p.301.

(本稿は、平成22年度大分県立芸術文化短期大学特別枠研究費による研究成果の一部である。)